

参考資料

- 1 インターンシップ取り組みの強化…………… 1
- 2 プログラム実践例(岩手県立大学の場合)…… 10

1 インターンシップ取り組みの強化

STEP1 学生・企業の傾向から課題を明確化する

今回の連携事業の取り組みをはじめ、インターンシップの充実と拡大を図る大学が増えています。インターンシップ制度を開始した当時は、学生や企業に対し下記のような傾向や課題が見られていました。取り組みの見直しのヒントとなったケースを振り返ります。

学生の傾向・課題



学生事例① キャリアセンター窓口にて



学生(Aさん)

月曜日からインターンシップに参加して3日が経ちました。今は生産管理システムチェックの手伝いをしているのですが、担当の方をはじめ周りの方たちがとても忙しそうで、ちょっと確認したいことがあってもなかなか聞けなかったり、それが気になっているうちに、別のところでミスにつながってしまったりして、なかなかうまく仕事を進めることができていません。

このまま続けても迷惑をかけるだけという気がして、仕事もあまりできていないし、できればもう行きたくないのですが…。

■ 学生 A さんの状況

学年	学部 3 年生
学部	情報処理関連学部
インターンシップ先	製造業(機械)での生産管理部門

[インターンシップ参加の経緯]

情報系の学部だが、父親が従事している製造業にも以前から興味があった。今回のインターンシップの募集職種を見て、いま学んでいることを活かせる可能性があるか知りたいということで申し込んだ。インターンシップ期間は 2 週間となっている。

[担当者より一言]

気を取り直して最後まで頑張る学生も多いのですが、なかには途中でやめてしまう学生もあり、企業に迷惑をかけてしまいました。個別対応にも限界があったため、このようなケースの発生を未然に防ぐためには事前学習のプログラムでどのようなことを伝えればよいか検討をしていきました。

課題

インターンシップ中のモチベーションの低下

必要な取り組み

- ・インターンシップ中に起こりうる場面の想定
- ・自ら状況改善する意欲と経験を得る価値認識

学生事例② 事後研修中・・・

(報告レポートの作成がなかなかすすんでいないところに声をかける)



学生(Bさん)

出来上がった冊子やチラシを梱包して数えたり、箱を片付けたり・・・5日間ひたすらその繰り返しでした。これ以上特に何も報告することがないんです。

印刷業の実際を詳しく知ったり、多くのことを学んだりできていたのに、倉庫でひたすら同じ作業で周りにも社員の方はいなくて、正直毎日苦痛でした。ただただ時間を無駄にしてしまい、インターンシップに行った意味がなかったのではと後悔してしまいます。

■ 学生 Bさんの状況

学年	学部 3 年生
学部	政治経済系学部
インターンシップ先	製造業(印刷)

[インターンシップ参加の経緯]

マスコミを希望していたが、かねてから興味があった第一志望の新聞社は日程があわず、第二志望で地元の印刷会社でのインターンシップを申し込んだ。インターンシップ期間は5日間だった。

[担当者より一言]

この学生の場合は、急きよ第二希望に決まったこともあり、目標を適切に設定できていませんでした。こういったケースが発生すると、学生はインターンシップのみならず働くことに対しても意欲を低下させてしまいます。学生と企業が互いの立場を理解してインターンシップに臨むために、事前のフォローが重要となります。

課題

体験評価が適切に
できない

必要な取り組み

- ・自分なりの目標を設定できるようにする
- ・インターンシップにおける多様な意義を伝える

学生事例③ 事後研修中・・・



学生(Cさん)

インターンシップはとても楽しかったです。お昼はみんなに連れて行ってもらったり、職場のみなさんはとても優しく、雰囲気もとてもよかったです。インターンシップが終わるのがさみしいとまで思っていました。

観光課での業務は、市役所の人たちがここまでやるんだということもたくさんあって、大変だなと感じました。でもこういった人たちのおかげで、私たちの街の観光が成り立っているんだと思うと、とても感謝したいです。本当にいい体験ができたと思います！

■ 学生 C さんの状況

学年	短大部 1 年生
学部	国際文化系学部
インターンシップ先	市役所(観光課)

[インターンシップ参加の経緯]

特に公務員志望というわけではないが、この機会に普段はなかなか見られない官公庁の仕事を体験してみたいということで応募した。

[担当者より一言]

インターンシップは単なる職場見学ではありません。その職場の雰囲気や仕事の様子を知ることはもちろん大切です。加えて自分自身の今後の学校生活や学び(専攻)における行動改善・促進や職業観の醸成、将来の職業選択との結びつけができることが、大学でのインターンシップの目的です。学生の中には、このように経験からの気づきがあまり深まっていないケースが時々見られます。

課題

気づきが深まらない

必要な取り組み

- ・体験評価の多様な視点を伝える
- ・目的意識の醸成

以上のような学生のケースをはじめとして、学生に対して感じていた課題は次のようにまとめられます。

学生の傾向・課題

- ◆ まわりがみんなやっているから、就活に有利と聞いたからなど、目的や動機が表面的
- ◆ 与えられたことをこなすことが目標となり、この機会をより活かす自助努力が足りない
- ◆ 体験を自分なりに内省して、適切に再評価ができない

このような課題に対して、インターンシップを通じて教員・職員がプログラムを通じてどう関わることができるかを検討した結果、次のようなポイントを意識することが大切だと考えました。同時に、事前や事後のプログラムにどのように活かすかを考えました。



学生に対する関わり方のポイント

- ◆ インターンシップの目的や意義を自分なりに理解することで、適切な行動目標を立て、自己の成長につなげる
- ◆ 学生の「主体性」を意識させることで、就職活動のみならず学生生活において発揮の機会を増やす連動性を意識する
 - 例① インターンシップの機会を活かす行動を具体例で示すことで、行動レベルを上げる。
 - 例② 体験の振り返りは、抽象的・具体的な問い(設問)を使い分けることで内省を効果的に促す。



企業事例① 企業訪問時・・・

(インターンシップ後にヒアリングをかねて企業訪問をおこなった際)

インターンシップは社長から「申し込んでおいて」って言われて、実施することになったのですが、正直どんなことをすればいいか分からなくて…。

将来的には大卒を定期的に採用していきたいと思っているので、こういう取り組みには力を入れていこうと思っているのですが、来てくれる学生は真面目で素直だけど大人しくて反応がよく分からないから、どんなことに興味があるのか把握しづらいんですよ。



企業(Dさん)

■ 企業概要

業種	製造業(印刷業)
[インターンシップ参加の経緯] 去年よりインターンシップ受け入れを行っているが、去年は希望者がいなかったため実施はなかった。今年は希望があり 2 名を受け入れた。不定期で新卒採用を行っているが、現在は中途採用がメイン。	

[担当者より一言]

最近受け入れを始めた企業に対しては特に、大学生のインターンシップで、学生がどういったことを求めて参加するのか、アルバイトとの違いをどうするのか、学生の特性を踏まえた効果的なプログラム例などを伝えることが大事だと痛感しました。現在は企業向け説明会のタイミングでお伝えするように努力しています。

課題

適切なプログラムについて情報不足

必要な取り組み

- ・企業におけるインターンシップの意義の理解
- ・他社等の情報提供

受け入れ企業の傾向・課題

- ◆ 受け入れ内容がしっかり決まっていないため、場当たりの対応になる
- ◆ 事前に告知していた内容と異なることに対し、説明がないあるいは不十分である
- ◆ 受け入れ窓口にくらべて受け入れ現場の意識は、後ろ向きであることが多い

企業に対しては、せっかく受け入れていただいているものの、なかなか効果的な実施に結び付かないケースも見られたため、あらためてここで企業に対する姿勢を確認しました。



企業に対する関わり方のポイント

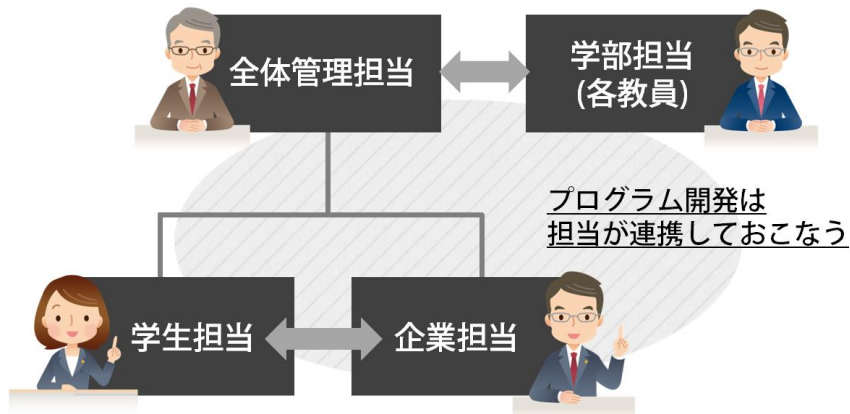
- ◆ 学生に達成させたいゴールを受け入れ窓口、受け入れ現場で共有する
- ◆ 出来る限り事前に内容を決めておいていただく、臨機応変である部分はそのことも説明する
- ◆ 窓口だけではなく、可能な限り全社的な理解や受け入れ体制を構築する

STEP2

適切な学内運営体制の見直し

インターンシップを運営する上で重要なカギを握るのは、学内の人員体制です。規模や取り組み状況に応じて異なるものの、学生・企業双方へ十分な対応をするためにどのような体制が必要なのかを改めて検討したうえで現在の運営体制を整えていきます。

検討後の運営体制



限られた教職員でインターンシップを運営するのはどの大学も同様です。ポイントとなるのは、学生担当や企業担当という緩やかな担当制を敷きつつも、それぞれを兼務しフォローし合い、双方の声が聴ける仕組みをつくることです。また、学生に対するプログラム開発も学部担当の教職員と連携して全員が携わる体制も重要です。それぞれの現場で得られた知見をプログラムに活用しやすいという点では非常に効率的な体制となりえます。

全体管理担当

役割

インターンシップ全体を統括する立場として、管理運営の責任を担う。

例) 岩手県立大学では

1 名が学生支援本部副本部長として在任。学内のインターンシップ事業を統括する立場だけでなく、東北インターンシップ推進コミュニティ事務局(幹事校)として運営統括を担当している。



全体管理担当者

キャリアセンター職員や学部の教員たちをつなぐ役割はもちろんのこと、地域の大学間の連携も視野に入れ運営を行っています。学生、企業、大学(教職員)という大きく3つの当事者に加え、支援機関や仲介業者、場合によっては保護者も絡みますからバランス感覚を持ちつつお互いの効果を高めることが今後ますます求められます。

各学部担当(教員)

役割

各学部におけるインターンシップ窓口として、学生対応から事前事後プログラム実施までをおこなう。

例)岩手県立大学では

2学部と1短大部ごとに選任している。学生へのインターンシップ参加の啓発や単位認定している場合の成績評価はもちろん、より多くの教員にインターンシップを周知理解してもらうため、学部内情報共有の役割も担う。



各学部担当(教員)

インターンシップは学部の教員によって重要性の認識に差があるため、どうしても学生からの対応に違いが出てしまいます。どのようにして横の連携を強めインターンシップを普及させていくかが今後の課題です。

学生担当(職員)

役割

学生へのインターンシップ周知や、登録の案内、受け入れ中のフォローも担当する。

例)岩手県立大学では

キャリアセンター内に学生の受付やマッチング、フォローまで一連の手続きを担当する職員が1名いる。学生の個別対応のほか、登録説明会の実施や事前プログラム策定なども兼務している。



学生担当(職員)

インターンシップに参加する学生をどのようにして増やしていくか、また、参加した学生がそれぞれの体験を今後の学びにどうつなげるかなどが、課題と考えています。

企業担当(職員)

役割

企業開拓をはじめとした、企業サポート全般をおこなう。

例)岩手県立大学では

キャリアセンター内に企業担当職員が1名いる。企業向け説明会や実施に際してのフォローのほかプログラム企画運営も兼務している。



企業担当(職員)

企業側の受け入れ体制が整っていないと、単純作業に終始したり、逆にレベルが高すぎてしまったり、プログラムが学生にとって適切なものとなりません。学生が何を求めてインターンシップに参加するか、そこをしっかりと企業に伝えることが重要だと感じています。

事前学習等のプログラム担当(教員・職員)

役割

インターンシップにおける事前や事後のプログラムを企画し、当日の運営や効果の検証をおこなう。

例)岩手県立大学では

学生担当、企業担当それぞれがプログラム開発にも携わっている。事前事後のプログラムは学部ごとにも実施されているが、キャリアセンターとしても様々なプログラムを実施している。



プログラム担当

参加そのものが目的になってしまっている消極的な学生のモチベーションをどうあげるかが、今の課題の一つです。優しく接しただけでは実際にインターンシップをおこなったときに困ってしまいますし企業にも失礼です。かといって負担をかけすぎてしまうとすぐに意欲を失います。そういった学生への関わり方については常に頭を悩ませています。

2 プログラム実践例（岩手県立大学の場合）

事前・事後学習プログラムの見直しと実践

岩手県立大学では、学生と企業双方への課題を整理して事前事後学習のプログラムの「ねらい」に落とし込み、一連の運営の流れを見直しました。

事前学習

これから学生がインターンシップに臨むうえで、心構えと意欲を醸成することを主な目的とした事前学習プログラムは、大きく以下のように分類しています。

[企業向け]

	プログラム	概要
1	企業向け説明会	インターンシッププログラムの概要を企業に理解頂き、受け入れ実施を促す

[学生向け]

	プログラム	概要
1	事前研修会	先輩・同級生の課外活動体験談を知り、学生の動機付けをおこなう
2	参加申込説明会	プログラムと参加方法を理解する
3	学部別事前研修会	各学部における単位認定に関わる注意事項を理解し、心構えやゴールの設定をおこなう
4	ビジネスマナー	社会で必要なマナーとコミュニケーションの取り方を学ぶ
5	直前研修会	自主的な行動をイメージしたロールプレイをおこない、インターンシップで得てくるものを考える

企業向け説明会「インターンシップ事業説明会」

プログラムのねらい

インターンシップの目的や意義を理解いただき、学生にとって学習効果の高いインターンシッププログラム作成のポイントや注意点のすりあわせを、企業と意見交換をしながらおこなう。

実施概要：

内容	<p>[前半 15 分間] インターンシップの概要、目的、スケジュールなどをガイドや、スライドを用いて、説明する。</p> <p>[後半 15 分間] 説明に対する質疑や、インターンシップ全般に関する意見交換をおこなう。</p>
工夫した点	<p>インターンシップ事業説明会単体では企業が集まりにくいいため、学内合同企業説明会や、経済団体などが主催する合同企業説明会の前後の空き時間を利用すると企業の人事担当者などが集まりやすい。</p> <p>一方的な大学の都合の説明ばかりにならぬよう、説明は 15 分程度とし残りの時間を全て質疑応答、意見交換にあてることで、企業側の意見の抽出や、認識のすり合わせをおこなう。</p>
企業の反応	<p>場の提供や受け入れに関する依頼をする際には「教育」という観点一辺倒でお願いしがちである。採用戦略や地域定着として検討している担当者・団体の思惑や立場も理解しつつ依頼、説明する事に注意が必要。</p> <p>受け入れ経験のある企業からは、既を感じている課題点や要望等が挙げられる事が多く、受け入れ検討中の企業からは、手続きや保険の加入について等の実務的な質問が上がる事が多い。</p>
今後の課題	<p>受け入れ経験の無い企業担当者は、興味を持ちながらも具体的なプログラムのイメージを持ちにくい。そのため、実際の様子や学生の声など、実例を交えた説明でイメージを持っていただけるよう、材料を集めておく事が大切。</p> <p>新規開拓と質の向上を一つのプログラムに盛り込む事は難しいため、受け入れを検討している企業、受け入れ実績のある企業それぞれに合わせたプログラムを検討したい。</p>

事前研修会「課外活動のススメ」

プログラムのねらい

先輩や同級生の課外活動の体験事例を基に考え、学生のインターンシップへの参加意識を啓発する。

実施概要:

内容	<p>ファシリテータより、3名それぞれの活動内容を、スライドを投影しながら本人の補足を交えて紹介し、その後活動中のエピソードや、心境の変化、学外に出向いて気づいた事などを中心に、学生に話してもらおう。後段では、ファシリテータよりインターンシップについて取り上げ、それによって得られる成果を紹介した。</p> <p>[登壇学生] Aさん 居酒屋の店長補佐アルバイトの体験談 Bさん 学生主体のプロジェクト活動の体験談 Cさん 2年次のインターンシップ体験談</p>
工夫した点	<p>インターンシップで学生に学んで欲しい「学業以外の活動にも主体性を持って飛び込む事」を意識させるため、インターンシップのみではなく、アルバイトや学生プロジェクトの参加者も登壇者として選定した。</p> <p>また話を聞く学生が、壇上の学生とレベルの差を感じてしまわぬよう、登壇学生とは事前に打ち合わせを行い、参加するときに感じたハードルや迷いの部分も語ってもらおうよう、すり合わせをした。</p>
学生の反応	<p>この時期では、インターンシップと就職活動を混同した認識の学生も多く、インターンシップの就職活動への役立て方を実践的に教えてもらえると勘違いしている学生からは「2年生向けでは?」という声があがった。</p> <p>また、壇上と聴衆の物理的な距離や、客席を巻き込むアクション等に踏み込まなかったため、「3人が素晴らしい人なのは分かった」というように、自分の学びとの紐付けが出来ていない感想も見られた。</p>
今後の課題	<p>学生が課外活動の本来の目的を理解し、「就職活動のための実践的なテクニック」のような正解のあるものではない学習の場であることを理解させることが必要。また、参加学生が単なる傍聴者とならないよう、アクティブな要素を加えるなどの工夫をしたい。</p>

参加申込説明会

プログラムのねらい

インターンシップの活動(目的・内容・参加の意義など)について理解する。特に大学が取り扱っているインターンシップ(大学間連携インターンシップ)への WEB での申込方法や留意点について理解する。

実施概要:

内容	<p>キャリアセンター職員が、ステージ上でスライドを使用し説明。前半は、インターンシップの意義について伝え、スケジュールに沿って提出物等の確認をした。</p> <p>後半は、受け入れ事業所リストを見ながら、実際にスライドで「インターンシップ in 東北」を動かしながらエントリー方法の説明をおこなった。</p>
工夫した点	<p>ポータルサイト「インターンシップ in 東北」からのエントリーは今年度初めての試みであったため、WEB 化したことで苦手意識を持たせることがないようエントリーが難しいことを強調した。</p> <p>名前の知らない企業でも実施プログラムや事業内容をしっかり吟味しながら行き先を選択する作業を実演することで、企業名や知名度にとらわれず幅広い選択肢を活用することを意識させた。</p>
学生の反応	<p>なんとなくインターンシップに参加しようと考えていた学生も、目的・意義を理解し、PC やスマートフォンなど日常使っているツールで操作できる WEB システムでの申し込み手順を理解することで、実感が沸き、参加意思が明確になるようである。</p>
今後の課題	<p>インターンシップ体験期間そのものだけを意識してしまいがちになり、事後学習へ参加しない学生も出てしまう。事前説明会の段階では、インターンシップ後に作成する報告書の作成や、事前事後学習含めてインターンシッププログラムであることを意識させるよう改善したい。</p>

学部別事前研修会(総合政策学部 インターンシップ事前研修会)

プログラムのねらい

インターンシップに臨むにあたってどのような認識を持ったり、振る舞ったりするべきかの心構えをする。

実施概要:

内容	<p>企業受け入れ担当者による経験等から、企業がインターンシップをどのようにとらえているか等の実状を理解する。</p> <p>企業受け入れ担当者レベルでは、率直な認識として「面倒なお客様」が来たとの認識を持っている。必ずしも歓迎されているわけではないため、インターンシップに行くにあたっては、その様な環境下で何を得てくるのか、事前準備を怠らない事が大切である。またその他に、学生は「個人」ではなく岩手県立大学を背負っていることを強く認識することもあわせて伝えた。</p> <ul style="list-style-type: none">・受け入れ企業の本音・担当者の学生に対する認識・「面倒なお客様」として「補助的な業務」の中で何を掴むのか・一人ひとりが県大の学生であることを自覚・情報セキュリティ(SNS やツイッターへの投稿)
工夫した点	<p>前職でインターンシップ受け入れ経験のある教員より、受け入れ担当者の本音を交えた辛口の講義をおこなったことで、説得力を持って学生に伝えることができた。</p>
学生の反応	<p>「認識があまかった」、「気を引き締めていきたい」という学生が多数だった一方、学生によっては非常に辛口な内容に、怖気づいてしまう事も確認された。</p>
今後の課題	<p>今後はいかに学生のモチベーションを高めつつ、気を引き締めて臨ませるかの検討が必要である。</p>

直前研修会「ケーススタディ・目標設定」

プログラムのねらい

実際のインターンシップ現場で起こりうる様々な事態を想定したケーススタディを通して、主体的な行動ができるよう意識を促す。また体験を通して学生の学びが深まるよう、あらかじめ評価項目を確認し目標を設定する。

実施概要：

<p>内容</p>	<p>インターンシップ先で起こりうる一つ一つのケースに対して、個々でとる行動を考えさせる。ファシリテータがとるべきである行動例(正解を絞らない)を示し、自己の回答と照らし合わせていく。</p> <p>[ケーススタディ](70分)</p> <p>①初日の挨拶の場面 企業の立場や役職、相手が自分に対してどのような認識を持っているか、それをふまえてどのように挨拶をすればよいかを考えてもらう</p> <p>②お客様に声をかけられた際の対応と行動 お客様から見た自分の立場や、トラブル対応の優先順位等、とっさの事例に臨機応変に対応するポイントを学ぶ</p> <p>③仕事の指示の受け方 事務的、補助的な作業の中でもどのように主体性を持って取り組むかの視点を伝える</p> <p>[目標設定](20分) キャリアセンターにて課している報告書を学生に配布する。報告書は、日々のレポートのほか、インターンシップにおける自己評価項目や、体験を通して学生に考えさせたい項目が記されている。あらかじめこれらに目を通した上で、このインターンシップで何を目標とするのかを記入させる。</p>
<p>工夫した点</p>	<p>これまで多くの学生が、インターンシップの体験中にコミュニケーションや報連相について主体的に行動することが出来なかったことを反省し、かえって自己評価が下がる傾向にあった。そこで、現場で実際に起こりうる事象を想定したトレーニングを行い、インターンシップ現場で主体的に行動できるようになることを狙いとした。また、インターンシップを通して得てくるものを事前に考えて宣言させ、より明確な目的意識を持つことを狙った。</p>
<p>学生の反応</p>	<p>「実際に起こりうることなので、事前に練習ができた」「不安が少し解消された」など、心構えの面や実践的な面、現場での不安の解消など、役立ったという声があった一方で、「バイトで日々体験している経験と変わらない」「業種が違うため、活用しにくい」という声もあった。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>充実したケーススタディであったが、個人ワークが長時間に及ぶため、集中が切れた学生も散見。参加した学生同士で回答を比較しあったり、意見を交換させる動きを入れるなど、アクティブにおこなう事で、より楽しく学習できるようにしていきたい。</p>

事後学習

事後プログラムは以下のような流れで実施をしています。

[学生向け]

	プログラム	概要
1	報告書作成 事後フォロー	学生が自身の体験を振り返りより深く考察する
2	(全学共通)事後研修会	自分のおこなった体験を業界探索に役立てる
3	学部別事後研修会	体験内容を共有し、専門性との紐付きを考える

[教職員向け]

	プログラム	概要
1	教職員向け体験研修会	教職員が企業に出向き、実際のインターンシップの実施内容を理解することで、効果的な実施方法を考察する機会を提供する

報告書作成 事後フォロー

プログラムのねらい

インターンシップ体験で得たものや変化したもの、今後への活用などについて振り返らせ、気づきを深める。またインターンシップ中に発揮されたコンピテンシーの自己評価、客観(企業)評価を比較させ、今後の学びに活用させる。

実施概要:

内容	<ul style="list-style-type: none">■ 日報…日々体験した業務内容■ 報告書…体験を通じて学んだことや意識の変化など■ アンケート…コンピテンシー項目に対する自己評価や充実度 <p>事前学習で配布しておいた上記書類に入力の上、実習後にメール添付で提出させる。</p> <p>教職員が全てに目を通し、メール形式で一人ひとりにコメントを送信する。 また、日報と報告書は企業へのお礼状と同封で発送している。</p>
工夫した点	<p>報告書への記載が一行程度と非常に薄い学生がいる。その場合は再度その一行を掘り下げて記入し再提出をさせている。</p> <p>自己評価の項目は、企業からのフィードバックレポートにて同じ項目を評価してもらい、学生が自己評価と他者評価のギャップを認識できるようにしている。</p> <p>次年度の運営に活かせるよう、インターンシップのそれぞれのプロセスに対しての学生の意見や要望も記入できる欄を設けている。</p>
学生の反応	<p>インターンシップ中は受け身の態度となってしまう、自主性、発信力が欠けていたことに課題を感じている学生が多い。</p> <p>特定の能力が伸びたという評価よりも、担当者から話を聞いたり、仕事をしながら職場を見学することで、働くことがどういうことなのかを知ることができたという評価が多い。</p>
今後の課題	<p>大学・企業に提出される報告書であるため、学生はプログラムや企業について良かった点ばかりを書きがちになる。項目を工夫することで学生の本音を探れるようなものとし、運営側、企業側双方にフィードバックできるようなものとしていきたい。</p>

事後研修会「全学共通 インターンシップ事後研修会」

プログラムのねらい

インターンシップを「一つの職業を試した」という視点で整理し、今後発展的におこなう業界・業種の探索に役立てる。

実施概要：

内容	<p>インターンシップ実施内容を「職務分析」の観点で再整理し、自分が認識した職業能力とその発揮度合いを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none">・体験した仕事にはどのような内容が多く含まれているか (情報を扱う、人と関わる、モノを取り扱う等)・体験した仕事に要求される適性能力はどの程度のレベルであるか (知的理解力、言語的能力等) <p>以上の項目について個人分析とグループ分析を行い、今後の発展的な職業理解の能力開発の目標を立てる。</p>
工夫した点	<p>厚生労働省の「大学等におけるキャリア教育プログラム」の中から、「職業分析」の内容を活用、インターンシップ実施に合わせて変更して実施した。</p>
学生の反応	<p>職務分析という観点での振り返りは、自分の体験をより精緻に意識することに役立った様子であった。</p> <p>多様な体験をした者同士が同じチームとなることで、自身の体験を様々な視点で認識すること、他者のインターンシップも疑似体験することができ効果的であった。</p>
今後の課題	<p>参加学生数が想定以上に少なかったため、自分の体験を他者の体験を通じて再評価することが十分できなかった。今後は事後学習としてインターンシップ前に参加動機を高め、スケジュールも確保させておく。</p> <p>この研修会後の更なる発展的な学習や体験にもつながるようなプログラムとなるよう内容を見直す。</p>

学部別事後研修会(ソフトウェア情報学部 インターンシップ体験共有会)

プログラムのねらい

インターンシップでの体験内容や得られたものを共有する事を通じて、自分の専門性についての気づきを深める。


実施概要:

内容	<p>①グループワーク インターンシップ先の専門性を中心とした各自の体験の説明 インターンシップを経験して思うソフトウェア情報学の社会での役割を議論 その他の情報共有と発表会資料作成</p> <p>②発表 各グループ 10 分程度で発表 インターンシップ先の専門性のグループ内の類似点と相違点について ソフトウェア情報学の社会における役割について インターンシップを経験して変わったことについて 今回のグループワークでメンバーから学んだことについて</p>
工夫した点	<p>刺激を与えるため、グループは学年横断で、1年生、2年生、3年生を混ぜたものとした。</p> <p>複数の教員が見回り、活発な議論がされていなかったり表面的な議論しかされていないグループには補助的にファシリテートをおこなった。</p>
学生の反応	<p>学生によっては他人が受けたプログラムを聴いて刺激を受けるようで、自分がおこなったプログラムの特長も改めて分かるようである。</p> <p>基本的には3年生が場を仕切ることが多いが、しっかり話す2年生もいて、それを見た3年生が刺激を受けていた。学年横断の効果はあったと感じる。</p>
今後の課題	<p>業種の近い者同士が集まるグループと、業種がばらばらになるグループそれぞれを教員側であらかじめ作成し行ってみたが、今後統一するか否か検討したい。</p> <p>インターンシップに参加しなかった学生も参加させ、刺激を与える事も検討したい。</p>

今後のプログラム展開について

- ◆ 時間割に入れることのできない、事前・事後学習については学修時間の確保が最初の課題となる。
- ◆ 今後さらに取り組みの拡大発展をすすめていくために、インターンシップ経験者はもちろん、インターンシップ未経験者にも刺激を与え、今後の学修や体験につなげるプログラムの検討が必要となる。

事前事後プログラムの実践にあたって、現状の課題を整理してからプログラムの目的やねらいを定め、具体的な流れを組んでいくことで、ある程度一貫性を持った実施ができた。そのため学生にとっては、事後学習において、インターンシップ実施前に設定した目標をもとにした振り返りが容易となり、その後の学校生活や就職活動への展開がスムーズになされるなどの効果も見られた。今後さらに良い取り組みにしていくために、引き続きインターンシップの在り方について模索しながら、プログラムの検討を重ねていきたい。



インターンシップ実施の基本手引き 参考資料

平成 28 年 3 月発行

〈制作・著作〉 東北インターンシップ推進コミュニティ

〈制作〉 ジョブカフェいわて

文章・画像の無断転載・複製はご遠慮ください